九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

こども国際PBL予備調査に見られる言語コミュニケーション

大神, 智春
九州大学留学生センター : 教授

https://doi.org/10.15017/7411154

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 34, pp.21-26, 2026-03. International Student Center, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学留学生センター紀要，2026，第34号，21－26
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2026, No.34, 21-26

こども国際 PBL 予備調査に見られる言語コミュニケーション[1]

Verbal Communication in a Preliminary Study of an International Project-Based Learning Program for Children

大　神　智　春*

〈要旨〉

本研究は、多言語接触場面において、異なる母語を持つ子ども同士がどのようなコミュニケーション・ストラテジーを用いて STEAM 教材を用いた課題を達成しようとするか解明することを目的としている。今回は、日本語・マレー語それぞれを母語に持つ幼児あるいは小学生のペアを対象として行った予備調査において、どのような言語コミュニケーションが見られたか報告するとともに、今後の実施に向けた課題について検討した。

1．はじめに

本研究は、様々な国籍や文化、言語を持つこども達が「ものづくり」をテーマとした STEAM（Science, Technology, Engineering, Arts, Mathematics）教育を通して共修する子ども国際 PBL（Problem Based Learning）の開発を目指した異分野融合研究である。子ども国際 PBL では、言語や文化の異なる相手との協働を通して多文化共生を体験・理解するとともに、STEAM に親しみ興味関心を持ってもらうことを目的としているが、効果的な PBL の在り方を検討するためには、(A) 子どもたちがお互いの言語が分からない場面においてどのような方法でコミュニケーションを図り課題を行おうとするか、(B) どのような STEAM 教材が PBL を行うのに適切であるかなどについて明らかにし、その結果をプログラム開発に活かしていく必要があると考える。本研究では、(A) に焦点を当て、2024年に実施した予備調査の結果を報告する。

なお、小学校高学年以上の児童や生徒を対象にした国際共修プログラムは、例えば三成他（2024）等様々な実践例があるが、幼児や小学校低学年の児童を対象にしたものはほとんど報告がない。しかし、幼児や小学校低学年の児童であっても、異なる言語や文化を持つ子どもと協働することはその後の人格形成や価値観形成の上で重要な経験となると考える。そこで本研究では、幼児および小学校低学年の児童を対象とした PBL 開発を目指すものとする。

2．調査目的・対象・方法

2－1　調査目的及び内容

一般的に、コミュニケーション手段として、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションをあげることができる（西田 2000等）。これらのうち、本稿では言語コミュニケーショ

*九州大学留学生センター教授　oga.chiharu.414@m.kyushu-u.ac.jp

1　本稿は大神（2025）に加筆修正を加えたものである。

ンに焦点を当て[2]、子どもたちがお互いの言語が分からない状況下でどのような発話を試みるか、その発話はPBLを進める上で何らかの役割を果たすか、あるいはPBL遂行には貢献しないものであるかを観察し、今後の効果的な子ども国際PBL開発に結び付けていくことを目的とする。

なお、PBLでは「これを切って」「一緒にこれを描こう」のように「指示」や「依頼」「勧誘」といったなんらかの意図を持った発話がよくみられると考えられる。そこで、本稿では、以下の観点で探索的に子どもの発話を観察する。

(1) 子どもたちにどのような発語が見られるか。
(2) どのような意図を持った発話であるか。
(3) それらの発話により、相手の子どもはどのような反応をするか。PBLを進めることにつながっているか。

2－2　調査対象者

予備調査には、日本とマレーシアの幼児と小学校低学年児童が合計８名参加した。本稿では、８名の中で言語コミュニケーションが見られた日本人児童２名を対象として分析する（表１）。また、表２は日本人児童とペアを組んだマレーシア人児童についての情報である。

表１　調査対象（日本の子ども）

対象者（日本人児童）	年齢（学年）	使用可能言語	背景
J1	７歳（小２）	母語：日本語 他にマレー語 方言を少し	父親がマレーシア人。
J2	６歳（小１）	母語：日本語	外国人との接触が多い。 母親はイタリア留学経験あり。 父親は中国駐在。

表２　ペアとなったマレーシアの子ども

対象者（マレーシア人）	年齢（学年）	使用可能言語
M1（J1のペア）	９歳（小３）	母語：マレー語 他に英語 日本語も少し分かる。
M3[3]（J2のペア）	５歳（年長）	母語：マレー語 他に英語

2－3　予備調査の実施と分析方法

予備調査は2024年８月にマレーシアのマラヤ大学にて５日間実施された。PBLでは日本人の子どもとマレーシア人の子どもがペアを組み、１日目から５日目まで同じペアで課題を行った。

次に、PBLで子どもたちが行った課題を表３にまとめる。

表３　子ども国際PBLで行った課題（堀尾 2025：144）

	午前	午後
1日目	－	アイスブレイク
2日目	コンパスを使おう	ひと筆お絵描き
3日目	光の三原色	絵で伝言ゲーム
4日目	現地視察	空中ディスプレイ
5日目	モビール　光と影	－

PBLでは、まず課題考案者（研究者）が導入を行い、PBLで何をするかの方向性を示した。その後、子どもたちがあらかじめ準備された材料を使ってものづくりを行った。指示や説明は日本語とマレー語で行った。PBL実施中は日本人大学生のTAや子どもの親も同席したが、なるべく子どもたちに自力で作業させるようにし、必要な時のみ適宜子どもたちをサポートした。

活動時間については、予備調査開始段階では、１つの課題につき約30分～１時間程度の所

2　非言語コミュニケーションについての報告は堀尾（2025）を参照。
3　堀尾（2025）と共通の対象者番号を付しているため、「M3」とした。M2は別の日本人児童とペアを組んだ。

要時間を設定していたが、特に幼児の集中力が長くは続かなかったことから、中盤からは15分～30分程度の活動に切り替えた。

今回、J1については２日目午前中に行った「コンパスを使おう」を分析対象とした。２人で協力し合いながら、決められた時間内にA4用紙にできるだけ多くの円を描く課題である。J2については２日目午後の「ひと筆お絵描き」を分析対象とした。子どもたちが交互に１つずつ線や図を描いていき、最終的に２人で１つの絵を書き上げるというものである。

分析においては、活動を録画したデータを用い、まず子どもによる言語コミュニケーションを抽出した。その後、それがどのような意図をもってなされたか、その結果相手はどのような反応を示したかを録画を見直しながら考察した。

３．結果と分析

３－１　J１の発話

J1の録画データは２分間のものしかなかったため、２分間に見られた発話を観察した。短時間のデータのためか、発話はあまり見られなかったが、二人とも活動の主旨をよく理解し、お互いに手伝い合いながら作業を行うことができた。そして最終的に大人の助けをほとんど借りずに２人で課題を達成することができた。J1の発話、発話意図、相手（M1）の反応を表４に記す。

堀尾（2025）でも報告されているように、発話J1-1では、M1はJ1がコンパスを使用する際一緒にコンパスを持って手伝おうとしたが、J1は一人で描きたかったため、マレーシア語の方言で「Tapo tapo（大丈夫、大丈夫）」と言った。J1は「自分は一人で描ける」という意思表明をしたと考えられる。これに対しM1は、J1がマレー語の方言を使用したことに驚いた表情をしたが、方言が面白かったようでニヤッと笑い、その後は手伝うのをやめてJ1の作業を見守った。J1の発話意図は適切に伝わったと言える。更に、J1がマレー語の方言を話したことでM1の緊張が緩和されたようであり、その後は、一方がコンパスを使用しているときにもう一方が紙を抑えるなど、別の方法で協力しあう姿が見られた。このペアについては、お互いが知っている言語の使用が協力に前向きな気持ちを生じさせる一助となったと考えられる。

発話J1-2では、J1の作業が終わりM1と交代するときに、M1が別の場所にいたため、J1はペアの名前を呼ぶ行動をとった。M1は自分の順番になったことに気づき、作業を始めた。

発話２は名前を呼ぶという非常に単純な発話ではあるが、ペアの注意を作業に向けるのに十分な効果があった。呼びかけによりM1の注意

表４　J1の発話、発話意図、相手の反応

発話番号	発話	意図	相手の反応
J1-1	（J1が円を描こうとしたところM1が手伝おうとした。しかしJ1は1人で描きたかったため） **Tapo tapo。（大丈夫、大丈夫）**	（自分が思ったことの）意志表明	M1はニヤッと笑い、次から手伝うことはしなかった。
J1-2	（J1の作業順番が終わったあと） **M1、M1。** （M1の名前を繰り返し呼ぶ）	（順番交代の）呼びかけ	M1は自分の作業順番だと気づき、作業を始めた。

を向けるというJ1の意図は十分に伝わっていた。図１はJ1とM1で描き上げた円である。

図１　J1とM1が完成させた円

今回、J1とM1が大人の助けを殆ど借りずに２人でPBLを達成することができたのは、２人の性格、年齢、作業内容の十分な理解など様々な要因が絡んでいると考えられるが、単純な言葉によるコミュニケーションの試みが効果的に作用したことも１要因となったのではないか。

３－２　J２の発話

J2はM3とペアを組んで活動した。順番に一筆書きを行い、共同で絵を描き上げる約15分間の活動を行った。J2は課題としてどのようなことをするか理解しているようであったが、どのように描けばいいか考えあぐねていたようで何度か大学生TAに質問していた。M3は本課題開始時は何をすればいいか理解していないようであった。結局、２人だけで課題を行うことは難しく、親や大学生TAの助けが必要であった。約15分間の活動の間、J2が明確にM3に対して話しかけたのは以下の３回であった（表５）[4]。

J2は主に順番交代の際にM3に話しかけていたが、M3は日本語が分からないため、J2の意図は伝わっていなかった。発話J2-1では、J2はM1に対し魚を描くようにと要求したが、M1が理解できなかったため、日本語が分かるM3の母親がM3に通訳しながら指示を出すことになった。

発話J2-2では、M3の作業が終わりJ2の順番になったが、M3がペンを渡さなかったため、J2は「それ、貸して。じゃないと書けません」と言って、手を差し出した。この手を差し出すという行為でM3はJ2の意図を理解したと思われる。しかし、それでも渡さなかったことから、再びM3の母親にマレー語で促され、ペンを渡すに至った。発話J2-3でも、再度、J2はM3にペンを自分に渡すよう要求し、手を差し出した。この状況は２回目だということもあり、M3は

表５　J1の発話、発話意図、相手の反応

発話番号	発話	意図	相手の反応
J2-1	（M3の名前を呼んで） **M3、魚描いて。**	要求	M3は日本語が分からないため、無反応。M3の母親に指示されて描き始めた。
J2-2	（J2の順番になったときにM3がペンを渡さなかったので） **それ、貸して。じゃないと書けません。** （手を差し出す。）	要求	ジェスチャーがあったので意図は通じたようであるが、母親にマレー語で言われるまで渡さなかった。
J2-3	J2の順番になったときにM3が再びペンを渡さなかったので） **はい、貸して。** （手を差し出す。）	要求	ジェスチャーを見て、ペンを差し出した。

4　発話は３回のみであったが、大人を仲介に、J2とM3は一緒に活動を行っていた。

迷うことなく差し出された手にペンを渡した。

J2と M3に関しては、言語コミュニケーションはうまく機能しておらず、非言語コミュニケーションがお互いの意図を伝えるのに一役買っていたと考えられる。

M3がJ2の発話になかなか応えることができなかったのは、日本語が分からなかったことに加え、内気な性格だったということも理由の１つではないだろうか。また、年長という年齢のため、自分の考えのみでどう行動していいか分からなかったという面もあるのではないか。M3は母親からマレー語で説明されればしかるべく行動することができていた。年長の年齢では、親など大人のサポートがある程度必要だと考えられる。なお、J2と M3はうまくコミュニケーションが取れていなかったが、積極的に話し M3に働きかけた J2の姿勢は評価すべきであろう。

J2は M3に直接働きかけるだけではなく、自分の意図が通じない時、M3の母親や大学生 TA に対しても働きかけており、母親や TA が M3に伝えることで、J2の意図が間接的に M3に伝わることにもなった。J2には活動を行うため様々なストラテジーを用いる工夫が見られた。最終的に、J2と M3は大人の手助けを得ながら図2の絵を完成させた。

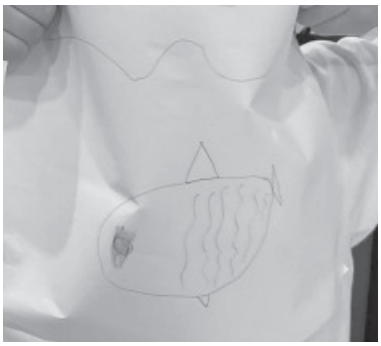

図２　J2と M3が描いた魚の絵

３－３　考察

今回の予備調査では、J1、J2にどのような発話がみられたかを観察した。J1の方では PBL を進める上で言語コミュニケーションも潤滑油の１つになっていたと考えられるが、J2の方では言語コミュニケーションはうまく機能していなかった。

本 PBL では、お互いの言語が分からない状況で子どもたちが協力しあっていく方法を模索することが目的の１つであり、言語コミュニケーションは必ずしも必須ではない。しかし、J1の事例のように、単語レベルの単純な発話がお互いの緊張を緩和する要因となる可能性はある。今後、事前学習やアイスブレイクという形でお互いの国の挨拶などを簡単に学ぶ機会を設けるなどするのも一つの方法である。

ただ、J1と M1、J2と M3の事例から、お互いの言語の理解以上に、年齢や子どもの性格もコミュニケーションを図る上での大きな要因となっていることも推察される。J1は小学２年生、M1は小学３年生であり、ある程度自分で考え行動することができる年齢であると考えられる。一方、J2のペアであった M3はまだ年長であり、大人のサポートなしにはその場で求められていることをするのが難しかったと考えられる。今後は、ペアの年齢をできるだけ揃え、大人が子どもの年齢に合わせサポートを行うことが望ましいのではないか。その際、大人が手助けしすぎると子どもの自主性が失われるので、どの程度までどのようにサポートすればよいかを検討する必要がある。

４．おわりに

本稿では PBL 参加者にどのような発話が見られたのかを報告した。今回は予備調査であり

十分なデータを揃えることができなかったが、それでも相手と意思疎通を図るための子どもたちの工夫を観察することができた。今後、更に多くのデータを用いて分析することにより、より良い子ども国際 PBL のあり方を模索していきたい。

註：本研究は JSPS 科研費23KK0039（海外連携研究）の助成を受けたものである。本稿は研究代表者堀尾佳以氏及び山本裕紹氏との共同研究の成果である。

参考文献

大神智春（2025）「こども国際 PBL 予備調査に見られるコミュニケーション・ストラテジー ― 発話行為に着目して ―」『異文化間教育学会第46回大会プログラム・抄録集』pp.288-289

西田ひろ子（2000）『異文化間コミュニケーション入門』創元社

堀尾佳以（2025）「こども PBL に見られる言語活動 ― 2024年予備調査報告 ―」『社会言語学会第49回大会発表論文集』pp.143-146

三成拓亜・神田彩英子・坂田直子・嵐谷恭子・瀧川智子・大谷みどり・篠村恭子・猫田英伸（2024）「国際交流を軸とした小学校，中学校外国語科における学びの接続：未来創造科での探究学習に基づくカリキュラム・マネジメント」『中国地区英語教育学会誌』54巻 pp.93-105